

2020年『春日権現験記』現代語訳

いちわ

興福寺の壹和僧都は、修学相兼ねて、才智たぐひ
興福寺の壹和僧都は、
修行も学問ともに励み、
才能・知恵が優れて並ぶ

なかりき。後には世を遁れて、外山といふ山里に
者がいなかった。
後には俗世から離れて、
外山という山里に

住みわたりけり。そのかみ、維摩の講師を望み申し
住み続けた。
その昔、
維摩会の講師になることを望み申し上げたの

けるに、思ひの外に祥延といふ人に越されにけり。
に、
予想外にも祥延という人に
先越されてしまった。

なにごととも前世の宿業にこそ、とは思ひのどむれ
「全てのごことは前世で行ったことの報いであるのだろう」。
とは思いを穏やかにしようとする

ども、その恨みしのびがたくおぼえければ、ながく
けれども、
その恨みは耐え忍ぶのが
難しく思われたので、
「長らく
とそう

本寺論談の交はりを辞して、斗數修行の身とならん
本寺の論談交流をやめて、
仏道修行のために諸国を歩く身になるう」

と思ひて、弟子どもにもかくとも知らせず、本尊・
と思つて、
弟子たちにあれこれと（事情）も知らせず、
本尊と

おひ

持経ばかり竹の笈に入れて、ひそかに三面の僧坊を
お経だけを竹製の背負う旅行箱に入れて、
こっそりと僧侶達の住居を

いでて四所の霊社にまうでて、泣く泣く今は限りの
いでて、
春日大社の社殿にお参りして、
泣きながら
最後の

法施を奉りけん心の中、ただ思ひやるべし。さすが
法施を差し上げなされたような心の内、
ただ推し量るのがよい。
そうはいっても

に住みこし寺も離れまうく、馴れぬる友も捨てがた
やはり住んできた寺も離れがたく、
慣れ親しんだ友も捨てがたい

けれども、思ひたちぬることなれば、行く先いづく
けれども、
決心したことなので、
行き先をどこと

とだに定めず、なにとなくあづまのかたに赴くほど
でさえ決めず、
を はり なる み が た
なんとなく
東方に赴いているうちに、

に、尾張の鳴海潟に着きぬ。

尾張の鳴海潟に着いた。

しほひ

潮干のひまをうかがひて、熱田の社に参りて、

潮干きの合間を狙って、

熱田神宮に参詣して、

かななぎ

しばしば法施をたむくるほどに、イけしかる巫女来
何度も法施をお供えしているうちに、
異様な巫女が来て、

て、壹和をさして言ふやう、

壹和を指さして言うことには、

なんぢ

「汝、恨みを含むことありて本寺を離れてまどへ
「おまえは、
恨みを心に抱えることがあって、
本寺を離れて途方に暮れている。」

り。ウ人の習ひ、恨みには堪へぬものなれば、

人の習性として、

恨みの感情には耐えられないものなので、

(あなたの行動も)

ことわりなれども、心になはぬはこの世の友
もっともではあるけれども、
思い通りにならないのはこの世の常である。

むっ

なり。陸奥国えびすが城へと思ふとも、エそれもまた

(おまえが)

『陸奥国の蝦夷の城に行く』と思つても、

そこでもまた

つらき人あらば、さていづちか赴かん。いそぎ本寺

恨みなくなる人がいたら、

さて、どこに向かうのか。

急いで本寺に

に帰りて、日ごろの望みを遂ぐべし」と仰せらるれ

帰って、

平素からの望みを遂げなさい」と仰ると、

かうべ

ば、壹和頭を垂れて、「思ひもよらぬ仰せかな。

壹和は頭を下げて、

「意外なご命令だなあ。」

こつじき

かかる乞食修行者になにの恨みか侍るべき。オある

このような乞食修行者に何の恨みがあるはずもありましょうか。

あるはずも

べくもなきことなり、いかにかくは「と申すとき、
ないことだ。
どうしてこのように(仰るのですか)「と申し上げるとき、

巫女大いにあざけりて、
巫女は激しく嘲笑して、

カ
つつめども隠れぬものは夏虫の
包み隠そうとしても、隠れないのは蜚のように

身より余れる思ひなりけり

身体から溢れる（恨みの）思いだなあ。
うたうら

といふ歌占をいだして、「汝、心幼くも我を疑ひ
という歌によるお告げを述べて

「おまえは、思慮が浅いことに私を疑って

思ふかは。いざさらば言ひて聞かせん。汝、維摩の
思ふのか。ではそれならば、言って聞かせよう。
おまえは維摩会の

講匠を祥延に越えられて恨みをなすにあらずや。
講師（の地位）を祥延に先越されて、
恨みの心を生じたのではないか。

こんさつ

かの講匠と言ふはよな、帝釈宮の金札に記する
あの講師（の地位）というのはな、
帝釈宮の金の札に記されている

なり。そのついで、すなはち祥延・壹和・喜操・
のである。その順番は、つまり、祥延・壹和・

観理とあるなり。帝釈の札に記するも、これ昔の
喜操・観理と（書いて）あるのである。帝釈宮の札に記してある順序も、
これは前世（の報い）

しるべなるべし。我がしわざにあらず。とくとく
による導きであるにちがいない。（順番を決めたのは）私のやったことではない。
早く早く、

どうぢん

けちえん

愁へを休めて本寺に帰るべきなり。和光同塵は結縁
憂いの気持ちを安らかにして、本寺に帰るべきだ。
和光同塵は仏道に縁を結ぶ

はっそうじょうどう

りもつ

の始め、八相成道は利物の終りなれば、神といひ仏
始まりであり、八相成道は衆生に恵みを与える最後なので、
神といったり仏と

しゅじょう

といふその名は変はれども、同じく衆生を哀れぶ
いったり、その名は変わっても、
同じく衆生を憐れむ

こと、悲母の愛子のごとし。汝は情けなくも我を
ことは、慈悲深い母親が子供を愛するようなものだ。
おまえは薄情なことに、私を

捨つといへども、我は汝を捨てずして、かくしも
見捨て（ようとし）たが、それでも私はおまえを見捨てず、このように

慕ひ示すなり。春日山の老骨、既に疲れぬ」とて、
後を追ひ、教えるのである。春日山の老体は、もう疲れてしまった。」と言って、（巫女に

上がらせ給ひにければ、壹和、かたじけなさ、
憑依していた春日明神は天に）上がりなされたので、壹和は有り難さ、

たふとさ、ひとかたならず、渴仰の涙を抑へて
尊さが 並一通りではなく、（春日明神を）深く信仰する感激の涙を抑えて、

いそぎ帰り上りぬ。その後、次の年の講師を遂げ
急いで（興福寺に）帰った。その後、次の年の維摩会の講師（になるという念願）を

て、四人の次第、キあたかも神託に違はざりけりと
遂げて、四人の順番は、ちよつど信託と違わなかったとのことだ。

なん。